

社会福祉実践における歴史研究の視座

—明治38年『石井十次日誌』の記述を手がかりに—

○ 佐久大学 高松 誠 (会員番号007441)

キーワード：T. J. Barnardo、石井十次、児童養護実践史

1. 研究目的

2022年に刊行された『戦後社会福祉の歴史研究と方法』（全2巻）では、第2次世界大戦後の我が国における社会福祉の歴史研究の方法論が体系的に集約され、研究視座が多岐にわたって示されている。それゆえ本書は、現在に至るまでの社会福祉の歴史研究の到達点及び今後の研究方法の指標となる内容が多岐にわたり示されている。この論文集の中で岩崎晋也（2022）は石井十次の研究で知られる柴田善守による社会福祉が持つ2つの矛盾点について考察する。それは、何らかの問題を抱え、支援を必要とする人々への支援が救済を通じての「社会の論理」への適応へと関係するという点が第1点である。しかし、そうした社会の中に生じる矛盾を変革し、社会の在り方に時として背を向けるということもまた、人を支援することの一側面であるという第2点目として主張される。つまり社会福祉は歴史的に矛盾する2つの論理の中で実践されていると想定できるのである。

こうした二律背反する支援の形態を、慈善事業が興隆した時代と社会福祉が誕生する時代の周辺から歴史的に考察することは、よりよい社会福祉の展開（マクロ・メゾ・ミクロを含めて）を考えていく上で重要であると本報告では考えた。そこで、過渡期にある支援の歴史の中で（本報告では19世紀後半から20世紀初頭を想定）、当時の社会事業家たちの実践を一次資料等から明らかにし、社会福祉実践の歴史的展開を述べていくことを構想した。その対象として本報告では、英国の児童保護事業の代表的な人物の一人として知られるT.J. Barnardoの事業と、その影響を受けたとされる岡山孤児院の創設者石井十次への影響を明らかにすることにより、社会福祉の歴史研究における社会福祉実践史上の成果を明らかにしていきたいと考えた。

2. 研究の視点および方法

本報告では、明治38年（1905）の石井十次の諸活動を、その内面も含めて叙述されている『石井十次日誌』（明治38年）を用い、明治38年4月10日の記述から展開されているT. J. Barnardoに関する言及を中心にまとめていく。そして、T. J. Barnardoの事業であるBarnardo's Homeの影響を岡山孤児院がいかに受け、これをどのような形で独自面も含めて展開していったのかをT. J. Barnardoの事業をまとめた「Something Attempted Something Done」と題された報告書も参照しながら補足していく。その際に、石井十次が影響を受けたキリスト教的な思考も考慮しながら、しかし、日本に土着したキリスト教という側面も意識しながら、明治38年における実践について考察していく。

3. 倫理的配慮

本報告は文献研究である、具体的な人物名、地名等については十分に配慮しつつ研究を

行った。史資料としての刊行年数は、100年以上を超えているため著作権等の問題が発生しないことは、Barnardo's 側の史資料を収集した際にアーカイブに確認をし、使用の了承を得ている。また、本報告は「一般社団法人日本社会福祉学会研究倫理規定」遵守し研究を行った。引用の際には、自説と他説を峻別し、原著者名・文献・出版社・出版年・引用箇所を明示した。なお本研究発表に関連して、開示すべき利益相反（COI）はない。

4. 研究結果

本研究では以下の3点の社会福祉実践史研究の視点から研究結果を『石井十次日誌』（明治38年）から示すことが出来た。

1点目は明治38年4月10日からの6か月以上にわたる Barnardo's Home の実践内容の聞き取りを行った石井十次は、自身のすでに行っている実践と Barnardo の実践を諷聴し、その内容で新規性のあるものに関心を示し、その内容を新しい実践として組み入れようと企図しているという点である。2点目は、施設養護の形態の中で、より家庭的な雰囲気女子児童の施設に導入することを Barnardo's Home の実践から取り入れたことは広く知られているが、こうした取り組みに自然環境に優れた地で生活するという情動的な配慮がなされており、その考えは、岡山孤児院の宮崎移住に関する言及にもその影響の一端が見られることが想定出来た、という点であった。そして、3点目は、石井十次が『石井十次日誌』（明治38年）の中で言及するキリスト教的な言及には、当時の日本社会の思想的な影響もみられることは否めないが Barnardo が報告書に引用した「Something Attempted Something Done」の言葉に現れているように西洋的な当時の格言や箴言が、石井十次の実践を鼓舞する者として現れているという点であった。

5. 考察

一次史料として『石井十次日誌』（明治38年）の T.J.Barnardo に関する言及に着目しながら、石井十次の実践が Barnardo からいかなる影響を受けて、その実践がどのように展開されたのかに注目することにより、現代の社会福祉が登場する前の慈善事業の時代、しかし、国家による最低限の支援がすでに存在していた時代の実践史の一形態を本報告は示した。そこから見えてきた記述は、実践者が支援のための実践を企図し、その実践課程において、よりよい実践の構築のために内外の他の実践を吸収しようとし、その実践を取り入れつつ、実践者の実情に合わせたものとして変容、独自性を持つものに変換していく実践の歴史を見出すことが出来た。今回の研究過程で石井十次のキリスト教とのかかわりを多く見出すことが出来た。先行研究で石井十次のキリスト教信仰に対する言及も多い。今後は多様な石井十次のキリスト教への理解を整理し実践史研究の中での位置づけについて研究を進めていくことも課題の一つとして取り入れていきたい。

文献

岩崎信也(2022)「社会福祉原論研究における歴史研究の位置付けについて」(『戦後社会福祉の歴史研究と方法—継承・展開・創造 第2巻<理論・総括>』) 近現代資料刊行会、

3-24頁

石井記念友愛社(1976)『石井十次日誌』（明治38年）石井記念友愛社